

保育の過程 (二)

津 守 真



幼児保育についての科学的な解明は、まだほとんどなされていないという過言であろうか。そのなかでも、集団保育において、幼児自身の生活がつくられてゆく過程については、その実態が明らかにされていない。多くのところで、すぐれた保育

の実際は存在している。すなわち、そこでは子どもたちは、それぞれの力を十分に用い、新たなことを学び、集団生活のたのしさと生きがいを経験している。しかし、そこには保育者の修練と苦心がある。これは保育者自身の日常的なことばによって表現しつくされないものがある。そこに保育の過程についての客観的な解明が必要となる。また、それによって、幼児の発達をすすめるような保育に近づくための研究に役立つであろう。

このような意図のもとに、前回より、保育の過程の輪郭を明らかにしようとし、保育の出発点である朝の問題をとり上げ

た。これが、一、保育の起点であって、その中で、(一) 子どもの状況、(二) 保育者の状況、(三) 保育者が子どもの状況を認知するしかた、について述べた。

今回はそのつづきである。

一、保育の起点(つづき)

(四) 保育者が幼児と関係を結ぶこと

保育者にとっては、子どもと実際にふれる以前から、保育は始まっている。前日の保育が終わったときから、翌日への抱負があり、夜になり、朝になって子どもとふれるまでに、それはもっと具体的な形をとってくるであろう。そして子どもとふれるときには、子どもの状況をできるだけありのままに認知しようとする心の構えができて、実際に子どもとの接触が始まるのである。

(1) 眼による子どもとの接触

保育者の眼と子どもとの眼とが出会ったとき、保育者と子どもとの間に相互的人間関係の第一歩が成立する。保育者は幼児の眼の中に、幼児の精神の動きを見てとる。張りのある状態、あるいは心にわだかまりのある状態などを、眼を通して知ることが出来る。

幼児もまた、保育者の眼の光によって、勇気づけられたり、あるいは、心の張りを失ったりするであろう。

保育者の眼と、幼児の眼とが出会って、幼児はそれによって安心して自分の活動を開始し、保育者は幼児の心にふれて、その日の精神的、身体的状況を知る。ここに、保育者と幼児との間に相互信頼が成立して、その後の保育の実際の出発点となるといつてよいであろう。

眼が人間関係において果たす精神的機能についての科学的研究は少ない。

最近のウォルフの乳児の笑いの研究は、この点で興味深い。彼は出生直後の新生児から観察しており、生後一、二週の新児ですでに、口もとをほころばせる笑いがあることを報告し、しかも、音をきかせたときに、それは増加することを述べている。第三週になると、物による音よりも、人間の声に対してより多く反応する。

第四週から五週にかけて、笑いに關して著しい変化がおこる。それは、母親の眼と子どもとの眼とがあうようになり、そのときに子どもは笑うのである。これが人間に対する笑いの始まりである。これ以前のものは、笑いということばは不適當かも知れず、英語ではこれをグリマス (Grimace) といつて、笑い (Smile) とは區別してゐる。

母親の眼と子どもとの眼とが会ったときに、人間の最初の社会的行動である笑いが生ずるということは、人間の理解にとつて意味のあることであると思う。眼があつた瞬間に子どもが笑うと、おとなも笑い返す。すると、子どももまた、それに笑い返して、お互いの間に感情の相互理解が成立するのである。ここに、これから後に發達する人間関係能力や社会性の基盤がある。

子どもの眼と出会ったときに、子どもが笑うと、おとなは、子どもと人間的接触をすることができたよろこびを感じる。多くの母親が、乳児がこの段階に達したときに、子どもを育てるたのしみがわかるようになったということを報告してくれる。保育のよろこびは、子どもとの人間的交流ができるようになったときに生じるものであることがわかる。

眼の機能については、現代の科学の方法を用いていくことによって、もっと明らかになる部分があるだろうと思う。しか

し、ここでもまた、倉橋惣三の詩的表現が、科学の対象とすべき事実をさし示している。たとえば「子どもの目」の中には、次のような表現で子どもの眼のはたらきについて述べている。

「いつも真正面から、真直ぐに相手を見る目」

「いつもあからさまに自分をさらけ出して、心の隅まで隠すところのない目」

「いつも一ぱいに見開いて、しつかり物そのものを見つめる目」

「いつも新鮮さに冴えて興味の上に輝く目」

「いつも柔らかいなつかしい味を湛えている目」

「人の心の明るさを受けて明るく、自らもまた容易に、相手の心の中に溶けてゆこうとする目」

(倉橋惣三選集第三巻育ての心 P 24)

幼児と眼を見かわすときに、保育者は幼児の眼の中に、このような幼児の心を見出す。そしてその目にこたえて、次の保育の段階がすすめられる。

保育者の眼については、次のような表現がなされている。

「わたしたちの目にとげはないか。わたしたちの言葉にとげはないか。わたしたちの気分にとげはないか。」

もとより自分で心づかぬ時のことである。まさかに、心づい

てそんなことのありようはないが、ちらりと光る目、ふと出る言葉、思わず動く気分、自分でも心づかない峻烈さはないか。

もとより瞬間のことである。直ぐ気がついて急いで取り直さずにはいないが、しかし、とげはいつでもちよつと刺すものである。その一突きが、もう相手の皮膚をやぶっているものである。」

幼児の方から見るならば、保育者の眼に、あるいはとげとげしきを見、あるいは親しきを見るであろう。

幼児に親しきや信頼を感じてくれる眼の光を持つためには、保育者には幼児の前に立つときに、どのような精神の状態であればよいのであろうか。自分自身の感情にこだわってはいられないのであろう。幼児に向かつて心が開いていなければならぬであろう。幼児に対して積極的に温い関心を保っていることが必要であろう。これらのことが集約されて保育者の眼の光になるのである。これは、保育者の側からいうならば、保育者自身が、幼児に向かうときの心の構えとして、日々くふうし、自身で訓練する問題である。また、他方、眼は心の窓であるといわれていることの、科学的解明を必要とする問題であると思ふ。

(2) 身体による子どもとの接触

朝、保育者が幼児とふれるとき、幼児の手を握り、あるいは、幼児の肩に手をおいて肉体的接触をすることによって、保育者と幼児との間の相互交流がすすめられることが考えられる。眼を見かわすだけでなく、一步すすんで、身体的接触をすることによって、親しきはいっそう増すであろう。入園当初においては、幼児を抱きかかえ、背中に負うなどすることによって、幼児は母親から離れて保育者に親しむことができるようになる場合もある。また、保育者のスカートにつかまったり、よりかかったりして、あとをついて歩くものもある。

欧米においては、人と人が会って、交際をはじめるときに、握手して眼を見合わすことは普通のことである。日本の習慣には握手することがないので、保育者と幼児とが手をふれることもまれであるかもしれない。しかし、握手というような形で身体接触をするときに、人間関係に何か質の異なったものが生まれないであろうか。(このことについては、いまのところ、私には断言することはできない。)

乳児保育において、身体的接触が重要であることは、すでにホスピタリズムの諸研究によって多くの資料が提出されている。抱いたり、ほおずりしたりして愛撫することが、乳児に安定感を与え、対人関係を親和的なものにする。そのことがひいては、精神的諸機能の発達に良い影響を与える。

幼児保育において、手をふれたり肉体的接触をすることがどのような作用をするのか、科学的な資料はいまのところ見当たらない。しかし、幼児と挨拶するとき、保育者が幼児の手を握ると、何か親しみの感情が湧くことを多くの保育者が経験している。また、みんなで輪になったときに、手をつないで輪になったときに、全員の間一体感や親しみがいっそう感じられることも、多くの人がびとの経験するところである。これが身体的接触のみによるものであるか、それともっと他の要因によるものであるかは明らかでない。ただ、保育の起点において、身体的接触が、保育者と幼児との間の人間関係をつくるのに、何らかの作用を果たしているであろうと考えられるのである。

(3) ことばによる接触

保育者が子どもにことばをかけるということも、保育関係の出発点において、たいせつなことである。

何でもよいから、ことばをかけることによって、子どもは保育者から関心をもたれていることを知ることができ、保育者と子どもとの間のつながりができる。また、子どもが保育者になれていない段階ではとくに、保育者がどのようなことを考えており、保育者からどのようなことを期待されているかを子どもが知ることができる。保育者と子どもとの間に緊張が感じられ

ているときには、声をかけることによって緊張が減少する。

それでは、保育の起点において、どのようなことをかけることが、その後の保育の発展にどのような作用を与えるものだろうか。

第一には、子どもとの間に親和関係をつくるためのことばである。たとえば「○○ちゃん、おはよう」きょうはうれしそうね」とか、親しみの感情から出たものであれば、たいがいのことばが役立つであろう。

第二は、その日に子どもが幼稚園にくるまでの経験を知らぬことばである。たとえば、子どもが手に何か持ってきたときに「おもしろいもの持つてるね、どこで見つけたの」などとたずねる。ただし、これは、せんさくではない。保育を發展させるために、子どもの経験を知らうとするけれども、すべて知ることが不可能であり、また必要でもない。かならずしも、子どもの経験を知らなくても、それを生かすことができる方法があるであろう。子どもの経験を生かして、そこから活動をすすめるためのことばが、保育の起点において必要なのである。

第三には、保育者の考えが伝えられるためのことばである。

保育者のその日の意図がひとこと加わると、子どもの活動が方向づけられるのに具合のよいことがある。しかし、この場合のことばは大へんむずかしい。子どもの活動をそれによって束縛

することもある。保育の起点におけることばのかけ方が、その日の保育をよい方向に向けるのにどのような作用をなすかということも、今後研究すべき課題であろう。

(4) 子どもの側からみるならば、自分と生活を共にしてくれるおとながいるという安心感、いっしょに遊べるおとながいるというたのしさが与えられること

上に述べた保育者の機能は、幼児の側からいうならば、この一点に集約されるであろう。朝、保育者にふれたとたんに、幼児は、きょう一日自分と生活を共にしてくれるおとなの存在を温かく感じるならば、幼児は安心して自分の生活にとりくんでいく構えができるであろう。また、きょう一日いっしょに遊べるおとながいることを感じるならば、あんなこともしてみよう、こんなこともしてみよう、先生もいっしょにきそってしてみようという気持ちの高まりができてくる。途中でどこかにいってしまいかもしれないおとなだと思ったときに、幼児の心は、そのおとなに対しては全面的には開かれぬのである。いっしょに遊べる相手だと思おうときに、実際にはおとなを相手にする遊びはほんのわずかで、自分たちの活動が展開していくのである。

(五) 環境、材料の準備

保育の起点において、物的環境の作り方、材料の出し方は重要な役割を果たす、子ども自身の活動がしやすい環境と、しにくい環境とある。すでに与えられた保育室の空間は、日によって変更することのできないものである。しかし、保育室の空間（大きさ、形等）は子どもの活動の場であるので、幼児の活動に適した保育室と園庭の条件については、より系統的な研究を必要とする。

一日の保育についていうならば、与えられた空間の中で、物の配置をかえることができるし、廊下の用い方、隅や裏庭の用い方などによって、すでにあるものの意味をかえていくことができる。幼児にとって、はいつていける場所、自分が遊べる場所がたくさんあるという認識は重要である。一步、園外に出れば、危険なものが多く、幼児にとっては自由にならない環境である。しかし幼稚園の中では、幼児が自分の力をためすことができ、自分で思うところに行くことができ、自分で物を動かすことができ、手にとって見るることができるという自由感が必要である。そこに、規模の大きな活動の成立する可能性ができてくる。

また、材料はその日の活動の素材となっていくので、保育者がどのような材料を選んで、どのように出しておくかというこ

とが、その日の保育をきめていくのに重要な要因である。ここに、その日の保育に対する保育者の見通しが反映する。材料の選択と準備は、保育が出發するときには、すでに保育者によってととのえられているものであるから、保育の起点以前の問題として考えるべきものであるかもしれない。

材料の出し方にもいろいろの場合がある。多くの物を出しておく場合、物は最小限にしておく場合、つくりかけ、遊びかけの状態で出しておく場合など、どのような出し方をするかによって、この次の保育の展開の状況がかわってくる。

環境および材料については、多くの課題があるが、今日は、保育者と幼児との間に成立する保育の過程を中心としていきたいので、次に進むことにする。

二、模索の段階

幼児が登園して、保育者と出会ったところから保育が始まるが、幼児が本格的に自分の活動ととりくむまでには、時間的経過を必要とする。そこで、子どもの側にも、いくつかのふむべき段階があるように思うし、保育者の側にも、それに応じた心の構えと保育の技法があるように思う。

もっとくだいていうならば、外からみると幼児は同じように遊んでいると見えても、朝、登園して間もないころの遊びと、

十時半か十一時ごろ、遊びが軌道にのったころの遊びとは、活動の質が違うのである。幼児が活動に没入して、自分の活動に定着しているときの遊びは、内容にも変化があり、幼児にとって新しい学習や発見がある。それに対して、登園して間もないころの遊びは、以前からの活動のくり返しであったりして、とくに新しい遊びは見出されない。しかし、一歩進んだ活動をするためには、その前段階として、この混沌とした低次の遊びの時期を必要とするのである。*1 この間に、幼児は、きょうはだれと、どんな活動にならとりくめるかななどを模索している。そこで、この初期の遊びの段階を、模索の段階と名づけた。次に、この模索の段階では、幼児と保育者との間にどのようにことが行なわれているかを明らかにしてみたい。

*1 この部分は、磯部景子との会話により、示唆されたものである。

(一) 幼児は、そこで活動できるための感情の安定を求めて、依存的になる。

朝、幼児が登園してしばらくの時間は、保育者に話しかけたら、保育者のそばに寄ってることが多い。また、ひとつの活動が軌道にのって、発展がみられるようになる以前の段階では、保育者への接触が多い。

このことは、ひとつの遊びの始まったときから、それが発展して終わるまでの経過を観察することにより、容易に知られる。また、多くの保育者の保育経験からも、このことがいえる。とくに朝のうちの活動に典型的なものがみられるし、入園当初の時期には、とくに著しい形であらわれる。

そのときに、保育者が依存行動にこたえて、幼児が安心感をもつことができると、幼児はそこで自分の活動を見出して、それを発展させていくことができるようになる。もしも、幼児が保育者に何かを求めても、保育者がうるさかったり、拒否したりすると、幼児はそこで遊んでよいのかどうかわからず、保育者の傍にいつまでも寄ってきたり、落ちついて遊びにはいることができなくと、依存行動からぬけ出すことができない。次にいくつかの事例をあげてみよう。

ある四歳児のクラスの三学期

登園した子どもが、種々の色の紙テープを並べ始める。

先生はその子たちと話しながら、後についてくるAに笑ってみせる。

先生「B子ちゃん」とぼんやり立っている女兒にほほ笑みかける。B子笑ってひき出しをあげる。……

先生、自由画をかいている子たちに、はなしかける。

先生「おはようございます」と登園した子の頭へ手を置く。

先生「こんにちは、今二人でいますからカラー写真とって下さい」とA子の手をとって写真屋の前へいきこしかける。

A男「ここ見なさい」と看板をさす。

先生「おわり、やすみ」と看板のところにかかれた文字をよむ。

自由画をかきながら「わはっはっはっ」と笑いながら先生を見る子どもたちがいる。

B子「これと違うの」とC子の絵と自分の絵とを見る。

先生「そうね、ちょっとにているわね」

これは、登園してから約二十分間の記録の抜粋である。(もとの記録が、幼児の教育、61巻5号、p 34、昭和37年に掲載してあるので、ここに引用した) たえず先生に話しかけてくる子どもの姿をみることできよう。

ある年少児のクラスの例

S 「オーイ」と庭から先生をよぶ。

先生「なあに」と声をかける。

Kは三輪車を走らせていて、ブランコの後にひっかかる。

「オーイ、せんせい」と先生をよぶ。

先生「うごかないの」とそばにいつてやる。

Yは砂場で容器をひっくりかえすと、きれいな型がぬける。「ほら」と先生をみると、先生は笑いかえす。

Oは三輪車を動かしていて動かなくなる。「せんせい」とよぶ、先生「ちょっとまってね、すぐいくからね」というが、しばらくすると、自分で動かせるようになる。

S 「せんせい」と先生のそばにきて手をひっぱる。先生は要求がわからないままに、いっしょに砂場にはいり、砂をいじっているうちに、ひとりで遊びはじめる。

これは、入園して間もないころの約十分間の記録である。先生はあちこちからよばれて、あちこちに気を配っている。しばらくすると、めいめいが遊びはじめる。

この二つの例にみるように、年少児ほど、また、入園当初ほど、保育者に対して依存性である。五歳児の朝の記録が本誌61巻1号に掲載されており、朝きたときからどんどん自分たちで遊びはじめるようすをみるので参照されたい。

いま、ここに、幼児が自分自身の活動をするための重要な条件として、幼児の依存性を保育者が受容することについて述べた。このことを、保育者の側からいうときには、ただ受容するというだけではいきれないものがあるように思う。幼児の依

存性を受容することができるためには、そのときの幼児の心にふれることができるような心の構えが必要である。そのところを、もっと科学的に分析することも可能であろう。この点について、また、倉橋惣三の文章を引用しよう。この例は、ここにあげた依存性の場面とはすこし違うのであるが、保育者のうけとめ方の問題としては共通のものを見ることができると思う。

「子どもが飛びついて来た。あつと思う間にもう何処かへ駆けて行ってしまった。その子の親しみを気のついた時には、もう向こうを向いている。私は果たしてあの飛びついて来た瞬間の心を、その時びったりと受けてやったであろうか。それに相当する親しみに応じてやったろうか。

後でやっと気がついて、のこのこ出かけて行って、先刻はとあったところで、活きた時機は逸し去っている。埋めあわせのつもりで、親しみを押しつけていくと、しつこいといったような顔をして逃げていったりする。某の時にあらずんば、うるさくに相違ない。時は、さっきのあの時であったのである。

いつ飛びついて来るか分からない子どもたちである」

(倉橋惣三選集 第3巻、育ての心「飛びついて来た子ども」P 40)

依存性を受容するということのさらにその奥にある心の構えはどのようなものであるかを、この文章は指し示していると思う。

(つづく)

日本幼稚園
協会主催

幼児教育講習会 (予告)

期 日 昭和四十三年七月二十二日(月)

二十五日(金)

場 所 お茶の水女子大学講堂及び体育館

第一部 午前九、〇〇—一二、〇〇

講演

第二部 午後一、〇〇—四、〇〇

リズム講習

講師名、演題等は次号でお知らせします。

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

日本幼稚園協会